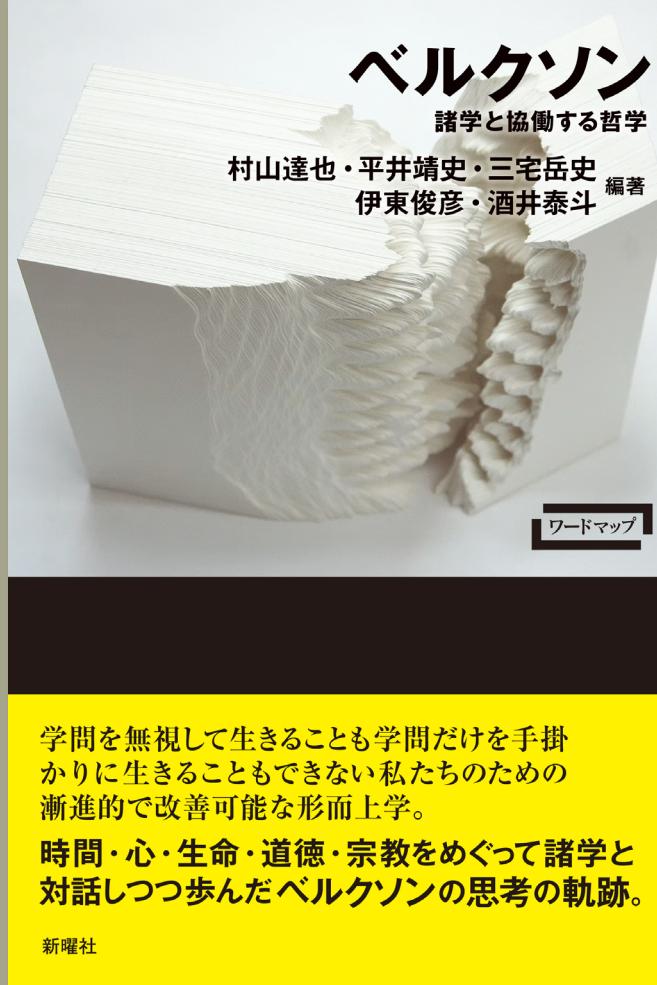


ベルクソン入門書二冊



ゲスト：
村山達也さん
酒井泰斗さん

『ワードマップベルクソン』(新曜社)

『ベルクソン入門』(青土社)

村山達也×平井靖史×酒井泰斗トークイベント

「今度こそベルクソン——迷わず辿り着くための最短ガイド」



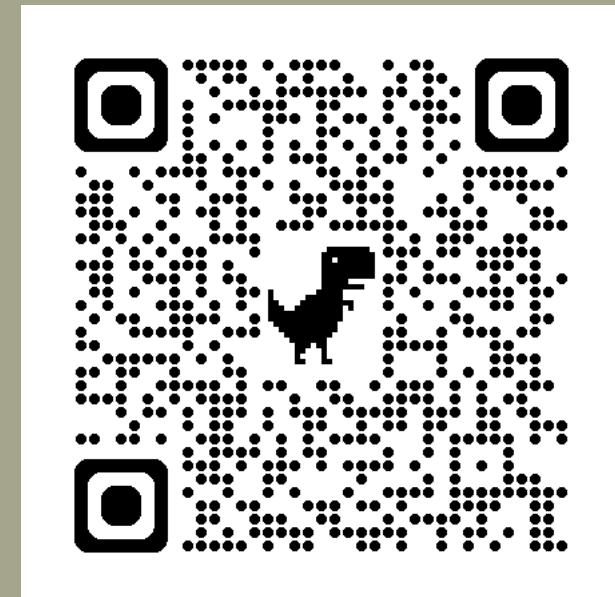
2月24日(火)19:00

代官山 蔦屋書店

来店参加：2,200円

オンライン参加：1,600円

ほか



村山達也『ベルクソン入門』

青土社、2025年

序

第一章 私たちは（いかなる意味で）自由なのか
——『意識の直接与件についての試論』

第二章 心身はどのように協働しているか——
『物質と記憶』

第三章 私たちが生物であることは何を意味する
か——『創造的進化』

第四章 集団で生きるはどういうことか——
『道徳と宗教の二源泉』

第五章 哲学的問題をどのように解決するか——
ベルクソンの方法

後書き

村山・平井・三宅・伊東・酒井編著 『ベルクソン 諸学と協働する哲学』

新曜社、2026年

まえがき

序論その1 私たちにとってベルクソン哲学とは何か

序論その2 ベルクソンにとって哲学とは何か

第1章 時間と自由——『意識の直接与件についての試論』

第2章 精神と身体——『物質と記憶』

第3章 生命と物質——『創造的進化』

第4章 道徳と宗教——『道徳と宗教の二源泉』

あとがき

ベルクソン講義リスト／ベルクソン関連年表

『ワードマップ ベルクソン』（企画の特徴）

酒井が企画スタート時に執筆者たちに依頼した2つのこと

■ 1. 話題構成

- ①ベルクソンが踏まえた同時代の知識（&哲学史に関する知識）
- ②ベルクソンがそれらにもとづいて立てた問い
- ③ベルクソンが与えた答え

■ 2. 想定読者

- 理学部の三年生でも（地方公立高校の国語科・社会科の教員でも）読める哲学書を
- 大正・昭和期の文化史に間接的な貢献ができるものを

『ワードマップ ベルクソン』(扉図)

第1章 『意識の直接条件についての試論』

伝統的 Q. 私たちは自由か。

言い換えると、私たちの意識状態は先行する意識状態によって決定されているか

Q1. 私たちの意識状態はどのようなあり方をしているか

A1. 私たちの意識状態は、時間のなかで絶えず変化しており、それ自体は空間的なところをもなない。

Q2. 時間とは何か

A2. 持続（性質の不断の変化）である

Q3. 空間とは何か

A3. 性質によらずに区別する原理である

Q4. 持続は空間によって表し得るか

A4. できない。それゆえ、意識状態という性質が不断に変化するものの状態を性質によらずに区別して「一方が他方を決定する」と述べることは意味をなさない。

伝統的 Q への A. 私たちの意識状態は先行する意識状態によって決定されていない。すなわち、私たちは自由である。

時間と自由

『直接条件』で扱った心身関係を論じ直したい

Q. 物質と心はどう関係しているか？

精神と身体

伝統的 Q1. 物質は延長を持ち心は持たない。両者はどう架橋されるか？

伝統的 Q2. 感覚に備わる質を物質は持たない。量と質はどう架橋されるか？

伝統的 Q3. 決定論は人間の自由と相容れない。両者はどう架橋されるか？

Q1. 心はどんな点で物質と共通か

A1. 物質が延長を持つのと同様に心の現在的側面である知覚も延長を持つ

Q2. 物質はどんな点で心と共通か

A2. 心の現在的側面である知覚が持続・質を持つのと同様に物質も少しは持続・質を持つ

Q3. この共通点は物質と心をどうつなげるか

A3. 心の過去的側面である記憶だけでなく、知覚や物質も持続を持つ。それらには緊張度の違いがある

伝統的 Q1 への A1. 伝統的 Q2 への A2.

知覚も延長を持つ 物質も質を持つ

伝統的 Q2 への A2.

物質も質を持つ

伝統的 Q3 への A3.

必然と自由は持続のリズムの違い

A. 物質、身体、心は、異なる持続のリズムを介して関係する

第2章 『物質と記憶』

第4章 『道德と宗教の二源泉』

Q. 人間社会に対しては宇宙の二つの秩序の違いはどのように働くか

A. 人間は社会秩序を維持する知性以下の習慣に従っている。それは自らの生存と社会の存続の維持に役立つ。

閉じた道德

A. 人間は様々な迷信に捉えられて生きている。それは知性が人間にもたらすリスクに対する防御反応である。

静的宗教

A. 人間は道徳的英雄が賦活する知性以上の情動に動かされることがある。そこでは人間は時に生存を度外視した利他性を示す。

開いた道徳

A. 人間は神秘家が体現する愛の躍動に動かされることがある。そこでは人間は世界を愛に値するものに変えていく可能性も持っている。

動的宗教

道徳と宗教

進化論を踏まえて人間社会について論じたい

生命と物質

認識論への帰結：

- ・空間性による認識である知性を発展させれば物質はよりよく把握できるようになる。
- ・知性は単独では生命のもつ新規性を把握できないし、多数の錯覚も引き起こす。
- ・生命の把握には、本能を知性と協働させながら目覚めさせることによって直観を起動し、発展させる必要がある。

Q1. 生物の認識能力は生命進化の観点からどう捉えられるか

A1. 進化は本能と知性を（さらに直観を）分歧させる

- ・本能：共感による認識
- ・知性：空間性による認識
- ・直観：本能の拡張による認識

A2.

- ・物質には異質性から同質性の方へ進む自己解体の傾向がある
- ・生命には同質性から異質性の方へ進む自己生成の傾向がある

Q2. 生命進化はこの認識論からどう捉えられるか

第3章 『創造的進化』

作図にたいへん時間がかかった。というのは・・・

『ワードマップ ベルクソン』（扉図の作成過程）

■作図にあたって執筆者たちに依頼したこと：「リストをつくって」

- ①ベルクソンが踏まえた同時代の知識（&哲学史に関する知識）
- ②ベルクソンがそれらにもとづいて立てた問い
- ③ベルクソンが与えた答え

➤ 執筆と作図が並行に進むかたち。

- リストの階層関係を考え、下位階層を刈り込んでいけば、扉図にたどり着く・・・はずだったのだが。
 - 刈り込む作業もそれなりに大変だったが、これはふつうのこと。
 - たまに意見が割れるところも出たりして、それはそれで有用な情報だった。
 - 問題は、刈り込んでいった結果できてきた図が・・・

『ワードマップベルクソン』（問い合わせリスト1）

『意識の直接与件についての試論』問題群とその関係（章のあいだの繋がりは未記入）

● 強度

1. Q：心理状態の強度は量で計れるか。A：計れない。（冒頭）だとすると（ここから問い合わせ2, 3, 4へ）：
2. Q：強度とは実際には何か。A：質（量の質的な印）である。
3. Q：量をもたないものはどう量化されるか。（特色：実証性）A：(i)外的原因、(ii)身体部位、(iii)心理状態の多様性を計測することによって。このうち「心理状態の多様性」を問うことで第二章に入っていく。
 - 3.1. 複合的な状態
 - Q：深い感情はどう量化されるか。
 - Q：身体表面における努力はどう量化されるか。
 - Q：この二つの中間にある状態はどう量化されるか。
 - 3.2. 単純な状態
 - Q：快苦の感覚はどう量化されるか。
 - Q：表象的感覚はどう量化されるか。
4. Q：私たちはなぜ量化するのか。（特色：言語、空間、知性批判へ）。

● 時間（時間とは何か&意識とは何か）

第一章から継続の「意識の多様性とは何か」が出発点。これを解く準備として：

1. Q：数とは何か。A：数の観念は空間表象を含む。
- この答えをもとに二つの多様性を区別したうえで、改めて問い合わせ2へ：
2. Q：意識状態の多様性とはいかなるものか。(67-68)ここから問い合わせ2.1と2.2へ：
 - 2.1. Q：空間とは何か。（心理的&形而上学的な問い。伝統的）A：非-質的な差異化の原理。
 - Q：空間表象は何に由来するのか（経験か、先駆的能力か、精神の働きか）（時間表象から導けるか）。
 - Q：空間は対応しているか。
 - 2.2. Q：時間とは何か。
 - Q：時間それ自体を意識はどのように体験するか。（特色：時間意識を手掛かりに時間と意識との本性を解明しようとする（当時の議論状況としてはそれなりに一般的）
 - 時間それ自体は計測できるか。
 - 運動は計測できるか（ゼノンのパラドックス）。
 - 力学における時間は何を計っているのか。

● 自由

1. 自由とは何か。A：人となりの表現。
2. 決定論は正しいか。特色：問い合わせの変形。従来の自由論の問題設定は妥当か。さらに変形：時間は空間によって十全に表されうるか。A：ムリ。
 - 2.1. 他の行為の可能性も存在したのか。（過去）
 - 2.2. 全条件を知ったら行為を見きるか。（未来）

『ワードマップベルクソン』（問い合わせリスト2）

『物質と記憶 身体と精神の関係についての試論』

GQ 心身問題：物質的身体と非物質的心はどう結合し相互作用しうるか。

第一章：表象のためのイマージュの選別について——身体の役割

- GQ1：知覚は心身問題においてどう位置付けられるか。
 - Q.いかにして知覚によって外界の存在にアクセスできるか
 - →知覚と物質の乖離を前提するため解きえない：「イマージュ」概念を用いて問題を再定式化
 - Q*.いかにして同じイマージュが知覚と物質という二つのシステムに参与しうるか (= いかにして知覚は物質全体から切り出されるか)
 - A.生の有用性によって選別・限定されたイマージュが知覚である。
- GQ1にたいする A：知覚は、本性上物質に属する。

第二章：イマージュの再認について——記憶力と脳

- GQ2：記憶は心身問題においてどう位置付けられるか。
- Q1：再認における記憶の働きは物質に還元できるか。
 - Q1-1：自動的再認における記憶の働きは物質に還元できるか。
 - A1-1：できる。習慣記憶による「運動メカニズム」の形成。
 - Q1-2：注意的再認における記憶の働きは物質に還元できるか。
 - A1-2：できない。失認は、記憶イメージを選別・限定する「運動図式」の損傷で説明でき、記憶そのものの損傷を含意しないから。
- GQ2にたいする A：運動メカニズムおよび運動図式は身体による働きに依拠しているが、記憶そのものは物質に還元されないため、心に属することが推定される。

第三章：イマージュの残存について——記憶力と精神

- GQ3：心身問題を時間の観点からどう定式化し直せるか
- Q1：知覚と記憶の違い、現在と過去の違いは程度の違いか。
 - Q1-1：知覚および身体は時間においてどう位置付けられるか。
 - A1-1：生の有用性に基づき知覚し行動する身体は、生成する現在に属する。
 - Q1-2：記憶は時間においてどう位置付けられるか。
 - A1-2：心の素材となる純粋記憶は、すでに完了した過去に属し、有用性の場外にある。
- A1：現在と過去の違いは程度ではなく本性の違いだ。
- Q2：（想起・一般観念など）心的活動全般は時間においてどう位置付けられるか。
- A2：心的活動は、純粋記憶とそれを選別・限定する身体の掛け合わせから生じるため、現在の知覚と純粋記憶という両極間の無数のバリエーションとして位置づけられる。
- GQ3にたいする A：知覚する身体を現在、記憶としての心を過去に対応づけることで、心が物質に還元されない、これが（専ら不定によってではある）過去と現在の時間上の本性

『ワードマップベルクソン』（問い合わせリスト3）

第一章 生命進化について——機械論と目的性（主な背景：当時の進化論、生命の哲学理論）

- 機械論と目的論どちらが適切に生命進化を論じられるか？ A. どちらも不適切（すべては与えられていると考え、できあがったものでできつつあるものを説明）。
 - どの進化論が生命進化（器官形成）をうまく説明できるのか？ A. いずれも説明できていない。（微小変異、突然変異、定向進化、獲得性質の遺伝）
 - どうすれば生命進化における形態（器官）の創造を説明できるか？ A. 生命進化に新たに形態を創造する運動（エラン・ヴィタル）を認める。

第二章 生命進化の分岐する諸方向——麻痺、知性、本能（主な背景：スペンサー哲学、博物学など）

- 生物の認識能力を進化論はどう説明するか？ A. 生命進化で分化した傾向の本質によって説明される。
 - 本能とは何か？ A. 本能とは共感である。
 - 知性とは何か？ A. 知性とは空間性による外からの認識である。
 - 直観とは何か？ A. 直観とは知性のまわりに残存した本能的なものの拡張である。

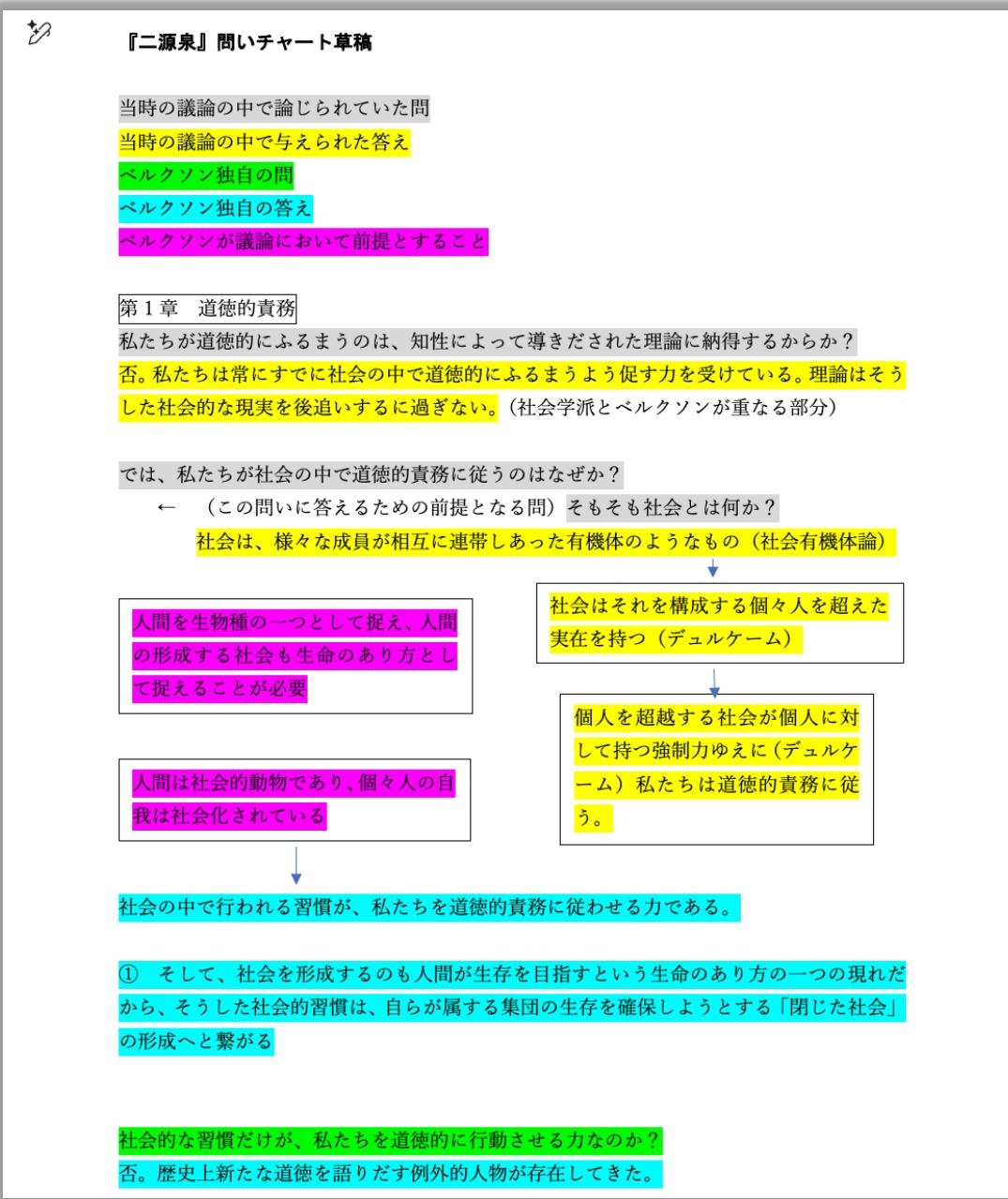
第三章 生命の意義について——自然の秩序と知性の形式（主な背景：フランス科学哲学、熱力学、宇宙生成論など）

- 科学は実在を把握できるか？ A. 物質に限れば把握できる。
- 物質とは何か？ A. 異質的変化から等質的変化へ自己解体する傾向である。
- 生命とは何か？生命進化の本質的なものとは？ A. エネルギーを蓄積し、非決定的な方向にエネルギーを解き放ち、宇宙になるべく多くの自由を導入する存在。
 - 宇宙は熱的死を迎えるか？ A. 宇宙の熱的死は必然ではない。

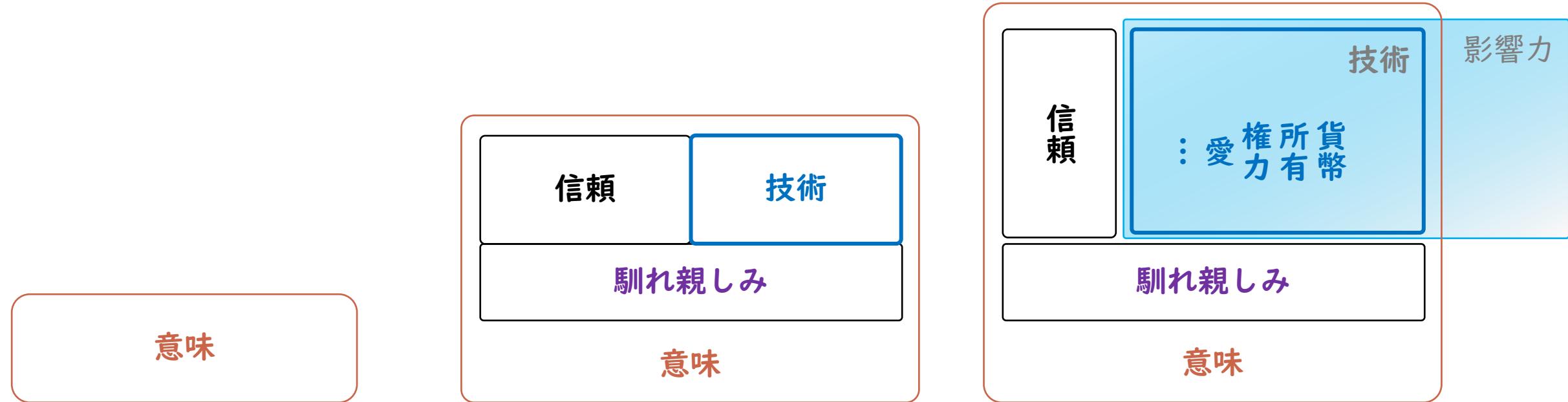
第四章 思考の映画的メカニズムと機械論の錯覚——諸体系の歴史についての概要、実在的な生成と偽の進化論（主な背景：哲学史）

- 根本的錯覚とは何か？ A. 存在や運動よりも無や停止があるという錯覚。
 - なぜ錯覚は執拗なのか？ A. 知性は有用性に向かうように進化したため。（真的存在である生成や運動を空間性のもとで認識し、それが錯覚の原因になる。）

『ワードマップ ベルクソン』（問い合わせリスト4）



図解の事例：発展型（ニクラス・ルーマン『権力』）



1968 「社会学の基礎概念」

- ルーマン社会学の1歩目は「社会学の基礎概念は意味である」というテーゼ。
- これは行為を基礎概念とするウェーバーに対抗して提出されたもの。
- その内実は後期フッサーの著作・草稿に依拠したもの。

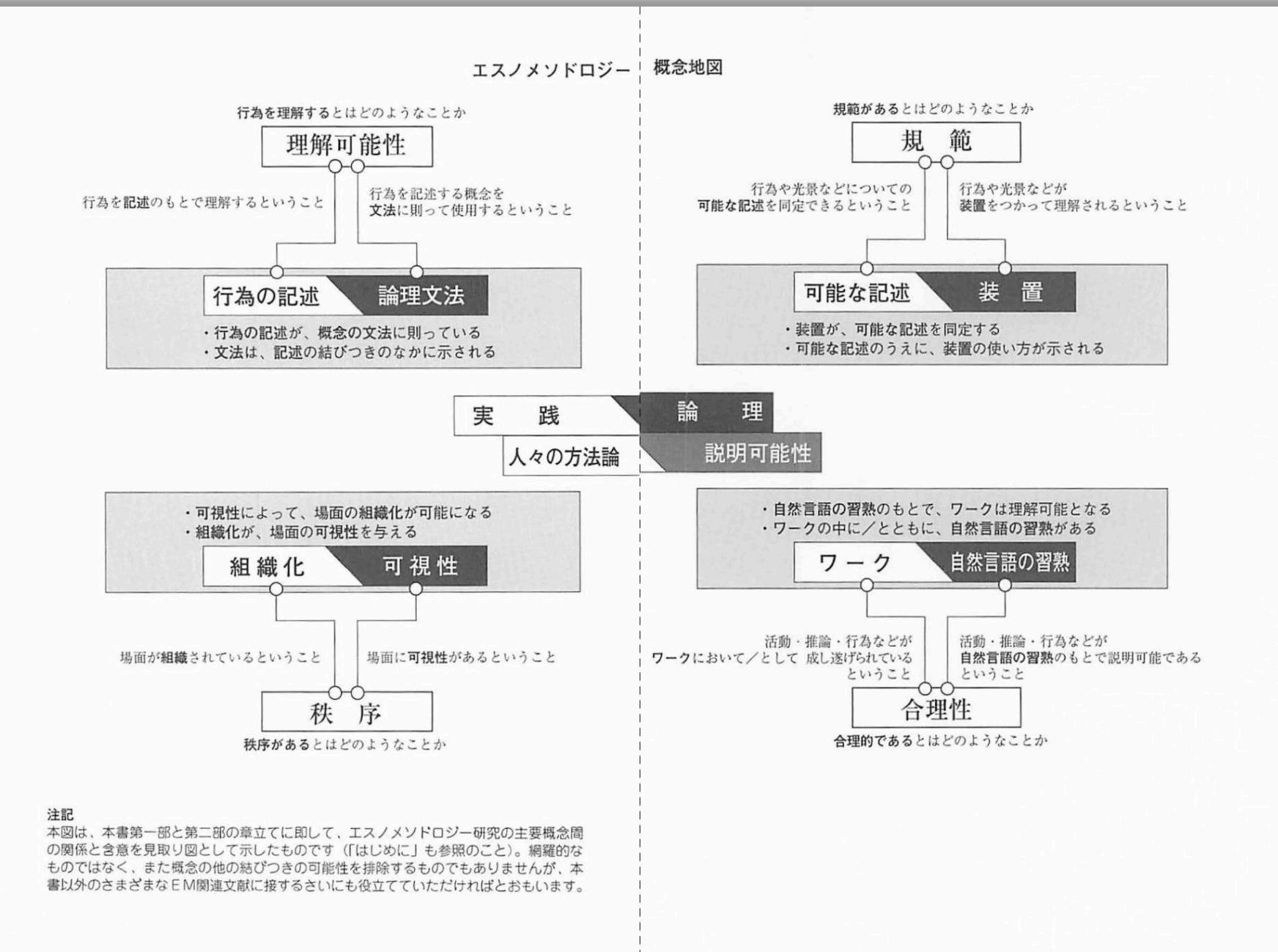
1968/1973 『信頼』

- 2歩目でルーマンがおこなったのは信頼論。
- ここで〈馴れ親しみ〉と〈技術〉はフッサー『危機』書に由来するペア。そこに〈信頼〉を割り込ませることで、ルーマン社会学の基本骨格が出来上がった。

1975 『権力』

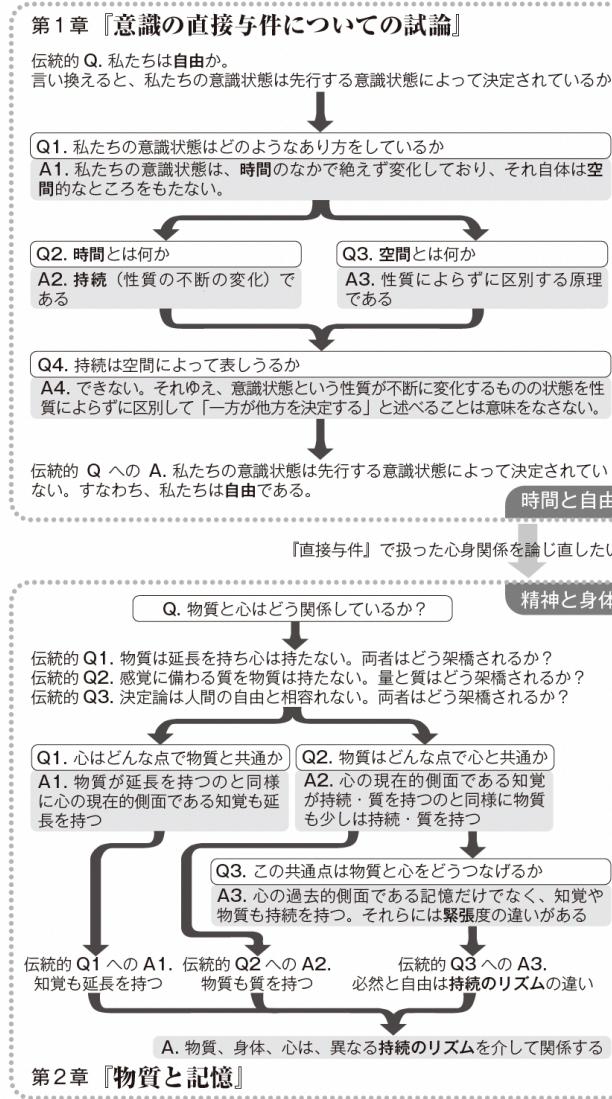
- ここからルーマンの仕事は社会学由来の機能分化論を、**技術**の内実を検討することによって肉付けする形で進められていく。
- その作業は、行動科学的影響力論を参照しながら、貨幣・所有・権力・愛といった影響力の諸形式を比較するかたちで行われた。
- しかし議論全体をコントロールしているのは「**生活世界**と**技術**」というフッサー由来の作業課題。

図解の事例：「共通性」型（『ワードマップ エスノメソドロジー』扉図）



- 一件異なるように見えるが、4つの象限は〈同じこと〉をやっている。
- 各象限は支え合うペアの複数の組み合わせから成っている。

『ワードマップ ベルクソン』(扉図)



- ベルクソンの著作には、こうした一般的な作図作法の常識が通用しなかった。著作ごとに別の発想で図を書くしかないのに、それに気づく=諦めるのに時間がかかった。
 - ベルクソンは、著作ごとに、新しい題材をその題材にふさわしい（～新しい）やり方で書いた。
 - 「ベルクソンの根本思想は～であり、この著作ではそれが～～のような仕方で現れている」みたいなまとめ方がしにくいく。
 - 一方では、これはベルクソンの偉大さを示す特徴。「新奇性」はベルクソン哲学の重大テーマの一つだが、それは単なる論題ではなく、ベルクソン自身の著作や生き方も関係している。著作ごとに新しくなってしまうベルクソン。
 - 他方では、ベルクソンのつきあいづらさの決定的な理由のひとつでもある。